

石巻仮診療所に待望のドクターカーを

震災発生から1年9か月が過ぎましたが、まだ被災された多くの方が仮設住宅で不自由な暮らしを続けておられます。中でも仮設住宅の高齢者は、一日中家に閉じこもりがちで、たとえ病を患っても医療を受けない方が増えています。また身体に障害をお持ちの方は交通機関も復旧しておらず病院に通うこともままならない状況です。

今厳しい冬を迎えた被災地 石巻に待望のコンパクト・ドクターカーが納入され、贈呈式が昨年11月29日石巻市立開成仮診療所で行われました。式典では小田PHJ 理事長から亀山石巻市長に目録が手渡され、その後仮診療所前でテープカットが行われました。仮診療所は今でも2千戸近い仮設住宅が立ち並ぶ地区の真ん中にあります。所長の長 純一先生は長野の佐久病院で長く地域医療に携わってこられ、被災地の高齢者を支えたいとの強い思いで赴任されました。毎日午前の診療が終わった後、昼食もそこそこにドクターカーは長先生と看護師さんに乗せて診察を待っている家々を訪問します。

このドクターカーには超音波画像診断装置、超音波踵骨測定装置、携帯型X線装置、心電計、AED等多岐にわたる医療機器を搭載しております。PHJは今後5年間のメンテナンス・サポートをしてゆきます。このドクターカー

が仮診療所の医療活動に役立ち、地域住民の心の安心や健康回復につながることを願っております。

このコンパクト・ドクターカーの寄贈は復興支援に熱い思いを寄せる篤志家の方が三井住友信託銀行様の被災地支援のための「特定寄附信託」のスキームを活用され、また三井住友信託銀行様がPHJをご指名いただき実現しました。さらにGEヘルスケア様からコンパクト・ドクターカーのコンセプトやその運用について多くのアドバイスをいただきましたことに心より感謝します。



贈呈式



長先生とドクターカー

東京事務所 横尾

巻頭言 / 有機質的な監査



PHJ監事
八木 和則
横河電機株式会社 顧問

私はピープルズ・ホープ・ジャパンの2012年社員総会・理事会で監事に選任されました八木と申します。よろしく願いいたします。私は横河電機の管理部門に長く在籍しておりましたので、PHJの設立時からささやかな支援者ではありましたが、活動の実態を十分に理解していませんでした。今般社員総会で年次報告を聞き、その後の懇談会でメンバーの方々の具体的な活動を伺うことができました。

PHJの活動が単なる資金や物品の受け取りと効率的な配分ではないことは理解しておりましたが、チームメンバーが現地のニーズを理解され、現地の方々と一緒に活動されていることがよく理解できました。今までの不明を恥じております。活動地域をタイ、カンボジア、インドネシア、ベトナムに適正に絞り込み、現地に密着した活動を継続されて

いることを感じました。一隅を照らす地道な活動が着実な実績を積み重ねていることを確信しました。

私は管理部門で広義の業務(会計)監査に直接・間接的に関与してきました。企業は営利(付加価値)の向上を目指します。このため、企業は収益(売上)の拡大と費用の効率化を求めます。監査では売上と費用の妥当性・適正性を確認します。一枚一枚の帳票は、企業の様々な活動を資金の視点で表現しております。ただ、コストの適正性チェックという監査業務はやや無機質なところがあります。PHJの収入の部は、会計的な見方では企業の売上と類似しますが、実質は様々な方々からの貴重な寄付や公的補助金の積み上げで構成されております。支出の部は、これも会計的な見方では企業の費用に相当しますが、実質は様々な具体的な支援活動を裏付けるものです。支出の部は貴重な寄付の用途として、厳格な監査が求められます。監事として独立性を堅持しつつ、一枚一枚の帳票からチームメンバーの現地での活動の姿が目に見え、皆様への理解が深まるような、「有機質的な監査」ができるよう努力してまいります。よろしく願いいたします。

PHJの益々のご活躍を期待いたします。

タイ：小児先天性心臓病手術プロジェクトを支援して

PHJは先天的な心臓疾患により手術を必要としながら、家庭の経済的な事情や地方病院の医療サービスの技術力などで手術を受けられない子供を支援しています。このプロジェクトに支援を頂いているエドワーズライフサイエンス株式会社様のご担当者に寄稿していただきました。

エドワーズライフサイエンス(株)は、米国に本社を置く医療機器メーカーで、主に心臓弁膜症の治療製品や心臓のモニタリング製品などを取り扱っています。今から半世紀前、電気技師で発明家でもあるマイルズ・ローウェル・エドワーズが、ポンプの働きをする心臓も人工的に作り出せるのではないかと考えたことが私たちの会社のはじまりでした。残念ながら当時の技術では人工心臓の開発には程遠かったので、オレゴン大学のアルバート・スター教授の協力によって人工心臓弁を開発することになり、2人はやがて人工心臓弁の製品化に世界で初めて成功しました。

心臓病で苦しむ人々を助けようとする医療現場の力になりたい、患者さんの生活の質を向上させたい、という彼らの思いは現在のエドワーズ社にも引き継がれ、革新的な医療機器開発の原動力となっています。一方で、その思いを新たな形にして世界に届けようと、2004年、米国にて「エドワーズライフサイエンス基金」が設立されました。2011年には200以上の団体に助成し、これまで50近い国々の団体を支援しています。

エドワーズ基金では、心臓病などの循環器疾患の治

療や啓蒙活動への助成「戦略助成」と、地域社会の活動への助成「コミュニティ助成」の2つのカテゴリーを用意しています。2010年、PHJによるタイの小児先天性心臓病手術プロジェクトは、エドワーズ基金が日本の団体を支援する初めてのケースとなりました。

タイでは、年間8000人もの先天性心臓疾患の子供が生まれ、1/3が手術を必要としています。うち半分は費用や技術面から適切な治療が受けられず、重症化する可能性もあります。PHJのプロジェクトでは、チェンマイ大学病院とランパン県立病院の協力のもと、手術支援を行うとともに、医師、看護師へのトレーニングなど、医療を提供する側の育成も行っています。

2010年の助成開始以来、24名の子供達が手術を受け、元気になったと聞いています。心臓はまさに命のポンプであり、その機能が回復することで体力や表情にも大きな変化が現れます。毎回レポートを頂き、その中に元気になった子供達の笑顔を見ると本当に嬉しく思います。これからも、治療を必要としている多くの子供達を救えるよう、PHJの活動を支援していきたいと思います。

エドワーズライフサイエンス株式会社 広報室
西山 貴子



手術を受けて元気になった
ジャカリン君

カンボジア：新所長就任のご挨拶

皆様、はじめまして。9月よりカンボジア事務所所長として駐在しております林朝子です。

思えば、保健に関わる仕事に大きな関心を寄せるようになったのは、学生時代にケニアで1年間保健ボランティアとして地域活動をした経験を通して、政治や経済、社会規範、伝統などその人が置かれた環境によっていのちの重みが上下してしまう悲しい開発途上国の状況、例えば同じ国でも、ある子はピカピカの病院で生まれ、ある子は誰の介助もなく土の上で生まれ、下痢で幼い命を簡単に落としてしまう、そんな場面を見てからでした。

その時から、どんな環境に生まれても、自分の身体は自分で守る知恵と力をつけ、また不幸にも病気に罹ってしまっても適切な医療サポートを受けることができる、そんな社会づくりに貢献することが私の目標となりました。この目標を持ちつつ、民間企業、青年海外協力隊(ガナ)、公衆衛生大学院を経て、このたび、まさに私の思いを実現できる任に就かせて頂けることに大変感謝しています。所長としてのカンボジア生活



は毎日が悩みの連続で、暗闇の中から一筋の道を探り当てていくような日々ですが、母子保健・地域保健の向上のための事業に自分の持てる力を注げることに喜びを実感する毎日です。

カンボジアの村々を訪問しますと、医療の可用性や質以前の様々な問題に直面します。貧しさ、道路、電気といったインフラの未整備、情報の不足、人の不足。

「正しい保健・医療行動」とは何か。セオリーとしての正解はありますが、村では村のリアリティがあり、その正解がいつでも正解になり得るとは限りません。そのリアリティにいかに関わり添って活動していけるか。これを忘れずカンボジア現地スタッフ共々より充実した事業を展開していきたいと思っております。今後ともご支援どうぞよろしくお願い致します。そして、ぜひカンボジアへいらしてください！カンボジアはとっても魅力的な国。実は私、この仕事に就く前から大学時代に三度の訪問歴のあるカンボジアファンでした。10年の歳月を経て、まさかこうやって戻って来れるとは！これも何か素敵なお縁を感じます。

カンボジア事務所所長 林

インドネシア：東ジャワ州・ポノロゴ県を訪問調査

PHJは、現在ジャワ島最西部・バンタン州で活動していますが、インドネシア保健省の次の3年間の活動許可更新を機にこれからの活動候補地・東ジャワ州・ポノロゴ県を10月9日から2泊(車中)3日の日程で、5名のインドネシア保健省担当官と一緒に訪問調査を実施しました。首都ジャカルタから約650キロを11時間、インドネシアに赴任して初めて夜行列車乗車の経験をしました。



ポノロゴ県は、東・西・南を高い火山に囲まれた乾燥地帯で暑く、河川は干上がり、水が一滴もない状態でした。「ブンガワンソロ」のソロ川や「ジャワ原人化石発掘地」などでよく知られた場所に近く、歴史と文

化のある地域ですが、インフラや経済活動など暮らし振りは非常にシンプルで、物価はジャカルタの1/3ほどです。

県保健局の説明では、栄養状態の悪さによる先天性障がい児が多いとい

うことで、村ではボランティアによる障がい者へのリハビリ活動が行われていました。また障がい者が多いにもかかわらず、近隣6県で専門医が1人で、医学・理学的なケアがほとんどされていないのが実情です。

医療施設での出産は99.8%と高いにもかかわらず、母子健康指標はPHJが現在活動しているバンタン州セラン県より約3倍も悪く、妊娠期の食事やケアの悪さも障がい児が多く生まれる原因の1つと考えられています。

今回の訪問を契機にもっと多くの保健情報を収集分析して事業提案したいと考えています。

インドネシア事務所所長 伊藤



五月女理事



Vol.8 国際理解—誤解は易く、理解は難し

今年2013年は、ペリー来航160周年に当たる。1853年は、近世日本がアメリカに知られることになった年でもある。

ペリー提督率いる4隻の東洋艦隊(旗艦サスケハナ号^(注))が横須賀に到着以来、日本にとって最も重要な二国間関係である日米関係はこの160年間、良好な時期、困難な時期、波高き時、嵐の時、信頼の時期、不信の時期もあったが、相互理解を深めそれを乗り越え世界に大きな影響力を持つ二国間関係になってきたのである。

お互いに理解する手段としては、活字・映像に頼ることが多い。いまから一世紀の昔、幣原喜重郎元首相が駐米大使であった時の回想録である。“在任中に驚いたことに、出会ったアメリカ人の中には一度も日本に行ったことがないのに非常に日本びいきの人が多数いたことである。どうしてそんなに日本が好きなのか。彼らはほとんどと云っていいほどラフカディオ・ハーン(小泉八雲)(写真参照)の、明治時代の素晴らしき日本を描いた著書「こころ」(英訳)を愛読していたのである。”活字の力は侮れない。



これもアメリカでの事であるが、以前対日世論調査の結果で興味深い結果が出た。南部のほとんど日本人の居ない州で対日好感度が極めて高かった。なぜ日本に行ったこともなく日本人に会ったこともないのに日本が好きなのか。それは自分の所有するカメラ・自動車などの優れた日本製品を通して日本をそして日本人を見ていたのである。

嬉しい事であるが複雑な気持ちにもなる。その日本にとって大切な恩人でもある日本製品が、近年誤解に基づき批判を受けたり不買運動の対象になったりするケースを見かけるのは悲しい事である。

近隣諸国に国家間の困難な問題を抱えている時期ではあるが、お互いに英知を出し合い、乗り切ってほしいものである。「国際的な相互理解」が成熟したとは言い難い。本当に「誤解は易く、理解は難し」なのである。

(注) サスケハナ号 2450トン、世界最大の軍艦。幕府軍艦成臨丸(オランダ製) 620トン、和船最大は200トン。



五月女光弘(さおとめみつひろ)
外務省初代NGO大使、元特命全権大使、元早稲田大・聖心女子大等兼任講師、文芸春秋ベストエッセイストの一人、著書多数、PHJ理事等。

会員のひろば

「フロック君」

岡田 芳江 (HOPE パートナー会員)

主人は長い入院生活から退院したある日、「自分が助かったのはたくさんの人のおかげだと思う。入院中から考えていたんだけど、病気の子供の支援をするパートナー会員になる。そして自分にもしものときはこの支援を続けてほしい」と私に言いました。私も日に日によくなっていく彼に「大丈夫、私にまかせて」と答えました。



支援の子供はチェンマイのフロック君でした。フロック君の写真を見ては早くよくなるといいねと二人で話をしていました。それからの主人はリハビリに近くの公園を散歩したり、元気になる為と人参ジュースを飲んだり、玄米を食べたりがんばりました。その甲斐があって半年後には仕事に行けるようになりました。彼はい



つも前向きで、私たちにいつも感謝をしていると言ってくれました。その主人が帰らぬ人となったのはそれから2年経った2008年の7月でした。

しばらくしてから彼の書類を整理しているとPHJのファイルがありました。早く連絡をしなければと電話をかけ、支援の継続を伝えました。何日か経ってフロック君のお母さんからのお手紙が来ました。お悔やみと主人への感謝と私への励ましが書いてありました。心にしみました。有り難かったです。それからフロック君やお父さん、お母さんに手紙をかきました。励ましているつもりが、いつの間にか悩みを聞いてもらっています。いつも私のことを考えてくれているとも書いてありました。支援されているのは私の方です。お母さんは、自分も人の役に立つ仕事がしたいと書いて下さいました。今も大変な状況の中、頭がさがります。

私も主人が亡くなってもう4年、今度機会を見つけてチェンマイに行きたいと思っています。笑顔のかわいいフロック君やお父さんお母さんにもお会いしたいです。それから最後になりましたが、毎回翻訳をくださるPHJスタッフの皆様本当に有難うございます。

各種イベントに参加

●グローバルフェスタ JAPAN2012

10月6日、7日 東京日比谷公園で開催されたイベントで「アジアのおはなしカレンダー」とPHJの活動紹介を行いました。カレンダーの絵の作者も訪問してくれました。



●むさしの国際交流まつり 2012

11月18日 東京武蔵境スイングビルで開催されたイベントでは「アジアのおはなしカレンダー」と活動紹介を行いました。準備段階では他の団体との共同作業があり、おまつり当日には訪問者から真剣な質問や提案があり、地域に根付いたイベントになりました。カレンダーの題字の作者も訪問してくれました。



第46回運営委員会を開催しました

12月12日(水) 5:30-7:30 東京水道橋にある全日本病院協会の会議室においてPHJの運営委員会を開催しました。前半をインドネシア、カンボジア、タイ、東日本大震災復興支援の活動報告に充てました。インドネシア事務所の報告は診療所建設を支援した企業の現地従業員がその診療所で教育を行った事例でした。続いて診療所建設支援をして下さっている他の企業の方が現地視察の様子を語って下さいました。

後半は今後の活動サイトの候補地、ミャンマー・ラオス視察報告の後、慶應義塾大学大学院生からのPHJに対する提案を検討し、飲物自動販売機によるPHJへの寄付

についてのご願い、スタディツアーの説明を行いました。

Q&Aでは夫々の事業を展開する地域の選択基準についてのアドバイスを頂き、活発な意見交換ができました。



支援企業の方の視察報告



Q&Aでの意見交換